

第3期中期目標・中期計画における臨床研究総括報告書

診療科（部）名：口腔外科（制御系）

主な臨床研究課題

- (1) 口腔がんおよび口腔前癌病変の予防法および最適治療を見出すための調査研究
- (2) 構音発達障害に対する音楽（歌）教育効果に関する検討
- (3) 顎顔面領域の先天異常に対する β -TCP（ β -リン酸三カルシウム）を用いた顎骨再生療法の開発

上記臨床研究の成果（発表済の論文がある場合はその論文を付記してください）

(1) 患者 508 名の術後長期生存者に対して、performance status scale を用い、外食可能、普通食摂取可能、会話不明瞭に分け、それぞれに対する要因を調査した。術後生存期間の中央値は 38 か月（6-250 か月）で、年齢、腫瘍の大きさ、軟組織再建の有無、術後の開口障害の改善、咬合関係の維持が術後の口腔機能に影響を及ぼすことが明らかとなった。

(Kondo T, et al. Performance status scale for head and neck scores for oral cancer survivors: predictors and factors for improving quality of life. Clin Oral Investig 2019 Apr;23(4):1575-1582)

(2) 本研究では、歌がどのくらい口蓋裂術後患児の言語治療に貢献できるかを検討した。7 歳以下の口蓋裂術後患児 40 名に、普段の言語治療時の内容を歌にした 30 分間のコンサートを行い、コンサート中の様子をビデオに撮影し、顔の表情、集中力、歌への参加程度を評価した。またコンサート内容を収録した DVD を参加家族に配布し、家庭での視聴頻度、子供の関心度をアンケートで集計した。幼い子であっても歌への関心は強く、歌を用いて集中して言語訓練ができた。特に 3 歳児では、コンサート後 1 年たっても歌への関心が持続して認められ、言語治療における歌の有用性が示された。

(Okano A, et al. Implementation of musical sessions as part of rehabilitation program for children with cleft palate. Oral Science in Japan 2017:69-72.)

(3) 唇顎口蓋裂患者の顎裂部に腸骨移植、下顎骨オトガイ部移植、下顎骨オトガイ部+ β -TCP 移植を行い、骨形成の差を CBCT にて評価した。下顎骨オトガイ部単独では骨形成が少なかったが、 β -TCP を併用することで、骨形成の量が改善することが明らかとなった。

(Miyagawa K, et al. Comparative evaluation of bone microstructure in alveolar cleft repair by cone beam CT: influence of different autologous donor sites and additional application of β -tricalcium phosphate. Clin Oral Investig 2019 Nov 9.)

第4期に向けての計画・展望

それぞれの研究で腫瘍、口唇口蓋裂への治療効果が認められた。この結果を日常の診療に生かすとともに、現在進行中の別の臨床研究で、さらに効果のある治療法を検索していきたい。具体的には、人工知能を用いた口腔粘膜診断法の確立や鼻咽腔閉鎖不全症に対する軟口蓋脂肪注入などである。また、腫瘍・口唇口蓋裂の今までの臨床データは、引き続き解析を行い、予後に係る因子を検索していく。